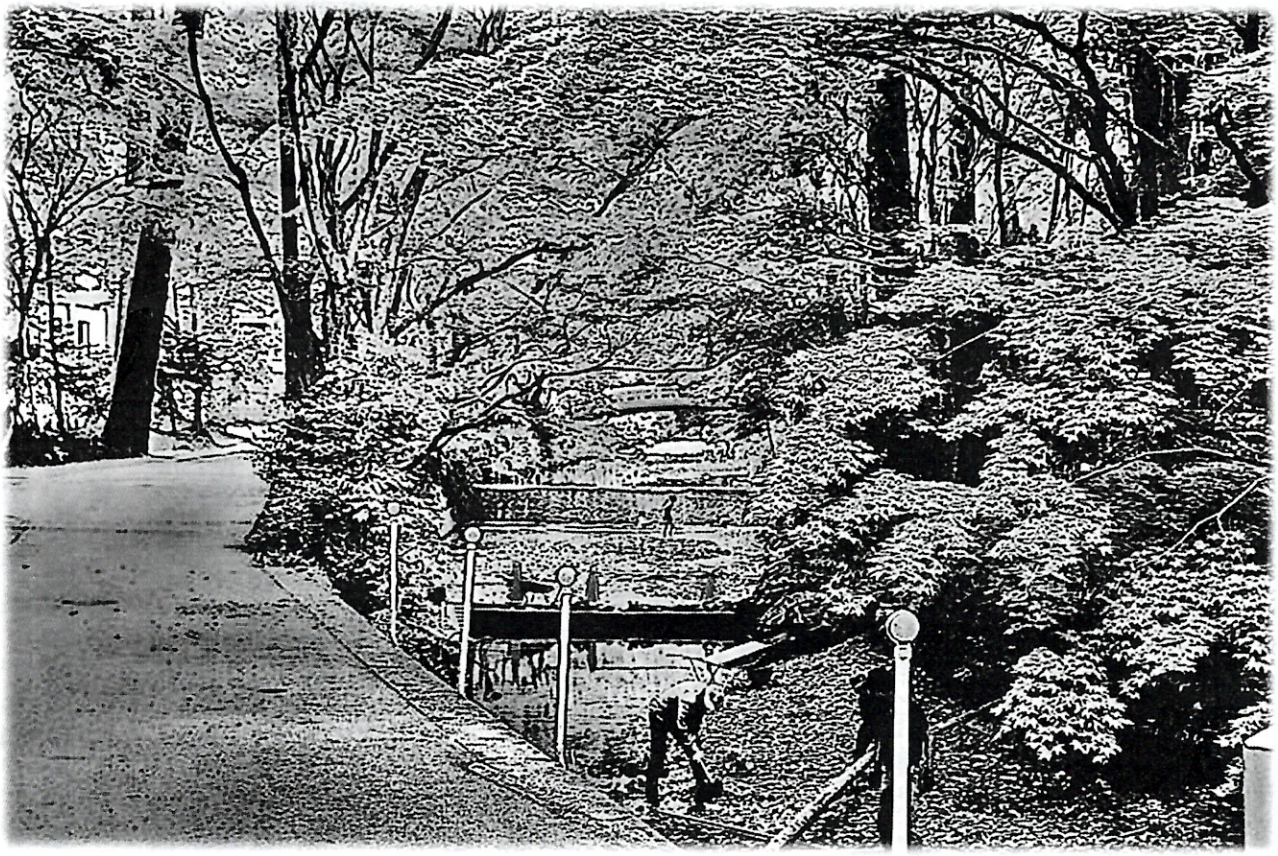
村上忠順翁顕彰会報



遠江國一宮 小國神社の宮川　（撮影編集：寺田）

村上忠順翁顕彰会報　第29号

編集　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　平成 30 年 3 月 30 日

★ 目 次 ★

・顕彰会設立３０周年を迎えて　P. 2
・「女性部研修会に参加して」　P. 3
・歴史探訪　「井伊直虎ゆかりの龍潭寺と遠州一宮小國神社の旅」に参加して　P. 4
・明治１４年の村上忠順　p. 5-6
・平成２９年度活動報告　p. 6
・忠順大賞入賞作品　P. 7 - 8

顕彰会設立三十周年を迎えて

村上忠順翁顕彰会　会長　近藤　光良

早いもので、平成三十年は、当顕彰会も設立三十周年を迎えることになりました。これまで継続できたのは、地域の皆様方のご理解ご支援と、歴代の区長様方に多大なご支援をいただいた賜物と深く感謝申し上げます。

この間、社会は大きく変化してまいりました。昭和六十四年、昭和天皇が崩御されたため、翌年平成と改元され、平成元年一月に、当顕彰会の発足、そして平成六年サリン事件発生、平成七年阪神淡路大地震発生、平成十三年アメリカ同時多発テロ事件発生、平成十七年愛知万博の開催及び豊田市が周辺六町村と合併、平成二十年リーマンショックの発生、平成二十三年東日本大震災の発生など幾多の大事件がありました。

当顕彰会においても、長年貢献された豊橋技術科学大学名誉教授　簗瀬一雄先生、愛知教育大学名誉教授　新行紀一先生、そして事務局の田中伸一様といった方々が残念ながら鬼籍に入られました。

これまで、当顕彰会は、郷土の偉人である村上忠順翁の日記『座右記』や手紙などを解読し、出版してまいりました。豊田市からも出版にあたって助成金をいただきましたが、次第に財政的に困難な局面を迎え、市が創設した「わくわく事業」に応募するとともに、地域の企業の皆様にも支援をいただき、何とか危機を乗り越えてきました。

そして今、大きな課題は後継者問題です。事務局も次第に高齢化が進み、若い方たちに引き継ぐ必要を感じております。これは、私どもの顕彰会に限らず、多くの組織が抱えている課題でもあります。

もうひとつの課題は、この顕彰会をもっと多くの皆様に知っていただき、さらに楽しく地域にとって有意義な会にしていくにはどうしたらよいかということです。これまでも、忠順翁ゆかりの地を訪れる「歴史探訪」、女性部による「歴史と食事を楽しむ会」、小中学生向きに「忠順さん物語」の配布、和歌に親しんでいただくための「忠順大賞」、そして、少し高度ですが忠順翁の著作や手紙の解読をする年四回の「四方樹（よもぎ）大学」（現在は名古屋大学大学院教授　塩村　耕先生）などを開催してまいりました。しかし、もっと広範な人たちに参加していただく必要性を感じています。

豊田市では近い将来、博物館の建設を計画しており、私ども南部地域の歴史や文化もこの施設でもっと深く知ることができることを期待したいと思います。豊田市南部の農村地帯にも、村上忠順翁を始め立派なふるさとの歴史と文化があることを多くの皆さんにも是非知っていただきたいと思います。そして、多くの子供たちにもふるさとの誇りを感じてもらいたいと考えます。

こんな思いで、これから始まる当顕彰会の三十年目を、会員の皆様とともに充実してまいりたいと存じます。今後とも温かいご支援をいただきますことをお願いいたします。

臨済宗方広寺派大本山
方広寺
―方広寺 ほうこうじ―

「女性部研修会に参加して」

加藤ふさ子

今回、私は村上忠順翁顕彰会行事として行われた女性部研修会「心とからだの癒やしの旅」に参加させて頂きました。

行き先は、今年話題になっているＮＨＫ大河ドラマ「おんな城主直虎」のゆかりの地、浜松いなさ地区で大本山方広寺、気賀の関所、大河ドラマ館等々の見学で盛沢山の内容でした。毎週直虎を見ている私にとっては、観るもの聞くもの全て興味深く一日の旅ではもったいない程の旅になりました。

まず大本山方広寺は通称奥山半僧坊方広寺と言われている格式高い臨済宗のお寺で、朱色に染められた山門をくぐると、テレビドラマに出てくる直虎の家臣、奥山家一族の朝利、息子の六左右衛門らの顔が頭に浮かんで来ました。

そして、この方広寺では、目的の写経と写仏を和尚様のご指導により心静かに始めました。筆を持つ手に心から集中した四十分間、とても短く感じましたが穏やかな幸せを頂きました。

写経と写仏

次は座禅に挑戦しました。座禅も和尚様のご指導に従って、背筋を伸ばして座り、ゆっくり静かに呼吸を整え、心を落ち着かせ、半眼の姿勢で不動の二十分間。静寂な時間を過ごしました。座禅中は段々と身体が熱くなり、何時肩を叩いて頂けるのかと期待するうちに終わってしまいました。これで良かったのかとおもいましたが、何故か心から有り難いと思うようになり、少しだけでも大人になれたような気がしました。感謝の気持ちになりました。

これらの体験は、今の自分を少しだけでも見つめ直そうとする機会を与えて下さったような気がしました。

最後に研修会らしさを感じたことは、車中で行われた○×方式のクイズでした。内容は、今回訪れる浜松いなさ地区の歴史に関する問題を、現地に着く前に○×で答え、帰りにもう一度、同じ問題を現地で観て聞いて体験したことを基に○×で答えるものでした。初めの分からないまま答えたことが、現地を観ることで正確に答えられる事になり、日常生活でも、確かな見方をする大切さを学ぶことが出来ました。今回、本当に楽しい一日を有難うございました。

歴史探訪

「井伊直虎ゆかりの龍潭寺と遠州一宮 小國神社の旅」に参加して

高岡町　田中　健一

平成二十九年十月四日(木)、少し肌寒い薄曇りの朝、伊勢湾岸から初めて通る新東名高速道路と順調にバスを走らせ目的地に向かいながら、車中で事務局より今日探訪する歴史由来など概要の丁寧な説明を聞き、見学地の見どころを予習することができました。途中、長篠設楽原パーキングエリアに立ち寄り、長篠の戦いにより織田信長、徳川家康の連合軍が武田勝頼を破った観光案内看板を見ながら戦国時代の壮絶な戦いに思いをめぐらしました。

しばらくバスを走らせ、遠州森町ＰＡスマートインターを出て最初の目的地「遠江の国一宮　小國神社」へ向かう道中、車窓で茶所らしい多くの茶畑の風景が眺められました。また、遠州森の石松のお話として、勝負運がめっぽう強かった森の石松にあやかろうと墓石を削って持ち帰る観光客が後を絶たないと聞き、その人たちの心境を少し察するものがありました。

やがて、小國神社に着き、巨木の杉檜の森に包まれ厳としてたたずむ太古の杜の境内に入ると、壮大で由緒ある歴史を感じ心洗われる想いがしました。神話「因幡の白うさぎ」のうさぎを助けた心のやさしい大黒様をお祀りしており、諸業繁栄、夫婦円満、縁結び、厄除けなど、御神徳の高い神様として多くの人に崇敬されているそうです。社務所にておいしいお茶とお饅頭をいただき、本堂にて参拝し家内安全を祈願した後、外から檜皮葺の屋根と入母屋造りの由緒ある拝殿を眺めると、深い歴史と高い格式を感じました。帰り道での境内を流れる宮川沿いの紅葉並木は、秋には多くの人が紅葉を楽しむことだろう。

小國神社を後にし、近くの食事処で待ち遠しかった昼食でコンニャク尽くしのヘルシー料理を楽しみ、次の目的地である龍潭寺に向かいました。

お寺の駐車場に着くと、大河ドラマ「おんな城主直虎」ゆかり寺として脚光を浴びており、観光バス等で大変多くの人が訪れていました。入口の山門の正面には井伊谷城跡の石垣がありお寺の歴史を感じられました。本堂の入口から釈迦大仏など仏像を拝みながらうぐいす張りの廊下を進み、先の御霊屋から折り返して国の名勝記念物で代表的な禅寺の寺院庭園である小堀遠州作庭園の眺めは、(中央に守護石、左右に仁王石、手前正面に礼拝石が配されており) 大変素晴らしく心の落ち着きを感じました。すぐ本堂出口から外へ出てしまったが、書院から眺める庭園は絶景であることを後から聞き、少し心残りでした。また、出口の鴨居に飾られていたさつきの花の盛んな美しい庭園の写真を見て、再びその季節に訪れようと思いました。そして、庭を見下ろす高台にある直虎、直政など徳川幕府を支え戦国時代を生き抜いた武将たちの井伊家代々の墓所をその時代に思い巡らしながらお参りしお寺を後にしました。駐車場に戻り、売店にてみんなから美味しいと聞いたみそ饅頭をお土産として買い求め帰宅の途につきました。

小國神社

今回初めて歴史探訪に参加して、「温故知新」の機会を与えていただき、また、車中での事前説明、資料配付などにより有意義で楽しい見学となり、大変お世話になった事務局に感謝いたします。

明治十四年の村上忠順

東京都立小岩高等学校主幹教諭
國學院大学講師　中澤伸弘

村上家には幕末から明治初年にかけての忠順の日記が十冊残されてゐるが、日記とは言へ、現在の手帳、備忘録のやうなもので、三切横綴の小冊であつて、天候とその日に読んだ書名と、幾つかの出来事が記載されてゐるにすぎないものである。それでも忠順の一年の様子が知られるものであつて興味深い。その中から明治十四年のものを取り上げて、最晩年(明治十七年歿)の忠順を紹介してみる。

この年に忠順は数へ年で七十歳を迎へた。十月十九日に「七十賀歌写」とある。忠順の七十歳賀に当たり祝歌が寄せられたのであつて、これを写し纏めたのであらうが今はどこにあるのであらうか不明である。忠順は例の細かな文字でこの日記を書いてゐるし、毎日の読んだ書物の名から老いてもなほ倦むことがなかつたことが伺へる。大方毎日「新文」と書かれてあるのは「新聞」のことである。天候は毎日詳細に書かれ、これ一つを取つても明治十四年の堤村の天候が明らかにならう。

この明治十四年は忠順にとつて二人の師を顕彰する歌集が世に出た喜びの年であつた。一つは紀州の熊代繁里の歌集『桜蔭集』のことであり、これは自ら上梓した。いま一つは遠州の石川依平の『柳園集』のことである。これは遠州の門人平尾八束が編輯したものである。繁里のことは度々本会報にも取り上げて書いたが、明治九年に歿すると、すぐさまその歌を整理して『花蔭歌集』としてまとめ、六月にはその序文を書いてゐる（刈谷の村上文庫蔵）。これは随分大部なのでそこから秀歌を抜き出しさらに『桜蔭集』と名付け、これを出版することにしたのであり、二年後の十一年十一月にはこちらにも序文を書いてゐる。繁里の亡きあと、後妻のスガ子がゐたが、これも十三年に歿してをり、長女のナカがその後を継いでゐたやうである。熊代家のことと自らの年齢がその刊行に勢ひをつけたのであらうか、十四年の二月二十七日に「熊代返事」とあつて、何かしら熊代家と連絡をとつたやうである。続いて五月十四日「桜蔭集校合十四枚」、と校合の記事があり、七月二十六日にはまた「木国クマシロ返事」とある。

十月五日には「知立郡役所桜蔭集板ケン免状ウケ取　十時出二時帰宅」とあつて、この日正式に刊行の認可を取りに郡役所へ出向いたのであつた。『桜蔭集』の表紙裏には「明治十四年九月二十五日版権免許」とあり、許可はこの前に下りてゐた。そして校正のことであらうか、十月二十四日「桜蔭集校合」、十二月十日「桜イン集校」、同じく十二日「桜イン對校」などとあり、十二月二十七日になつて「桜蔭集四部巴ヨリ来」とある。出版された『桜蔭集』が年末になつてやつと手許に届いたのである。先の表紙裏には「十二月二十五日出版」とあつて、その日付は正しいと言へる。この巴とは岡崎の版元のやうで、九月二十六日に「東吉同行岡崎巴太郎往」とあつて、この版権が許可された翌日に東吉同伴で行き、正式な依頼をしたのであらう。また十二月五日には「巴太郎来」と来訪のことが書かれてゐる。何かしらの話があつたと思はれる。

一方『柳園集』は六月刊行と刊記にあるが、これも年末の十二月十七日に『柳園集』を読んだ記事が初見であり、五日後の二十二日に「遠州返事　石川先生集礼一円入」とあることから、その謝礼を送つたことが分る。年末の二十九日にも『柳園集』とあつて、年末に師を思ひ出してはこの歌集を繰つたことであらう。

太陽暦を採用してまだ十年経たない頃なので、忠順の周囲は旧暦の正月を祝つてゐた。一月二十五日に煤払、二十八日にモチツキが行はれ、旧正月の一月三十日には「雪三寸」

と言うた天候であった。
　三月二十五日、娘とし子の夫である深見篤慶が五十四歳で逝いた。日記には「藤十死　ニヒホリ行」とだけ書かれてゐる。娘婿としても先に逝くとは逆縁であり、悲しい出来事であつた。二十八日「藤十葬儀」とあり、忠順は前日に葬儀に奏上するためか「誄」を考へてゐる。このあとは幾つかの「神葬祭記」などを写してゐる。そして篤慶歿後、一月経過した六月二十五日に、「東京藤井希璞書状来宮様ヨリ藤十へ千疋恩賜来」とある。藤井希璞は日吉の神職藤井希烈の男で有栖川宮家の家令であった。この日熾仁親王から維新時の篤慶の勤皇事蹟を顕彰して千疋が贈られたのであつた。七月二十二日には「有ス川献本ニヒホリ出」とあつて、忠順の著作を献納したやうである。この日また「新葉社へ詠草出」とあり、九月末には五十銭を送付してゐる。新葉社は「歌文新誌」といふ雑誌を刊行してゐて、忠順も歌を採られてゐる。
　忠順所蔵の軸物については、『蔵幅一覧』と言つた目録を自ら編輯してゐることを会報に書いたが、それはこの年のことであり、十月二十八日に「蔵幅一覧哥詩部」、翌日に「文ノ部」とあつて、その作業がなされてゐることがわかる。興味深いのは九月十八日に散髪の記事があり、「矢作髪カリ八銭」とある。また年末の十二月二十八日には「河水久澄認ニヒホリ出」とある。これは翌年明治十五年の歌会始の勅題「河水久澄」の題の歌を深見方から送つたことを意味する。当時は締め切りがいつであつたのか、年末に送付してゐるのであつた。歌会始の詠進を忠順はこの三年前から初めてゐるやうである。これが明治十四年の忠順の生活であつた。

平成二十九年度活動報告

○ 四月二十三日
★定例総会　参加者一〇九名
★「忠順大賞」表彰式　対象者二十名
★記念講演　「書物を巡る三河の文化風土」
講師　名古屋大学大学院教授　塩村　耕　先生

○ 七月五日
★女性部研修会　参加者四十一名
「心とからだの癒やしの旅」
・浜松市　方広寺
写経・写仏体験　精進料理体験
座禅体験　本殿・奥山半蔵坊見学
・トヨタ会館見学

○ 十月四日
★歴史探訪　参加者三十八名
「井伊直虎ゆかりの龍潭寺と遠州一宮小國神社の旅」
・遠江國一宮小國神社　正式参拝
・久米吉　宮前田楽にて昼食
・井伊谷　龍潭寺見学
・トヨタ鞍ヶ池記念館見学

○ 八月五日・九月一日・十月七日・十一月四日
★四方樹大学　参加者延べ四十八名
講師　名古屋大学大学院教授　塩村　耕先生
講義内容　忠順翁の「手紙文」

四方樹大学受講風景

○ 十一月二十三日
★忠順翁命日墓参

第十二回忠順大賞入賞作品

応募期間　十一月二十三日から
　　一月三十一日
応募総数　一七三五首
入賞者　二十名
選者　久米翠雲先生

○　小学生の部

豊田市長賞　堤小　六年一組　原田　泰正
家の中　暖房つけて　母を待つ
部屋のぬくもり　心の寒さ
※学校から帰り、ただいまと言うがまだ母は帰っていない。身体は温まったが、心は寂しいまま。

豊田市教育委員会賞
堤小　二年一組　小田　昇平
会いたいよ　天しになった　弟に
天までとどけ　かぞくの思い
※天使となって、逝ってしまった弟に会いたいという切実な思いが強く伝わる。ぼくだけでなく家族みんな思っているよ！

市議会議長賞
会長賞金賞　堤小　一年三組　佐藤　百花
はじめての　小学校　あねのあと
おいかけたけど　もうすぐ一人
※入学してから今まで、姉のあとをけんめいに追っていたけど、もうすぐ二年生。一人できちんと歩けるよ。ありがとうお姉ちゃん。

会長賞銀賞　堤小　六年四組　川上　莉穂
何度目だ毎年こうれい　もちつきが
もう手伝いは　任せてください
※六年生になった私。今まで何度餅つきの手伝いをしてきたことか。自信と思いやりの心がつよく伝わります。

会長賞銅賞　駒場小　二年二組　伊藤　大葵
青空に　よいしょの声が　ひびくとき
もちとはねるよ　ぼくの前がみ
※きねを使ってお餅つき、おばあちゃん家。みんながよいしょとかけ声で応援してくれる。きねもぼくの前がみもとびはねる

中日新聞社賞
駒場小　六年二組　伊藤　優樹
お年玉　何に使うか　考えて
母に伝えし　三日目の朝
※しんせきの皆から貰ったお年玉。有効に使いなさいと母。迷いに迷いやっと三日目に母に伝えた。はてさて、使い道は。

優秀賞　堤小　二年四組　福田　倖清
ひこうきに　一人でのった　冬休み
ぼくもドキドキ　そぼもドキドキ
※ぼく、一人でばあちゃんちに行く。冬休みに初めて飛行機に乗った、ドキドキ。ばあちゃんもドキドキしながら待ってたって。

優秀賞　堤小　二年三組　石川　桃佳
大すきな　みかんとうとう　あと一つ
お姉ちゃんと　半分こしよ
※かごもりのみかん。お姉ちゃんと二人で、テレビを見ながら食べた。あと一つになってしまった。半分こした、いいねえ。

優秀賞　堤小　五年四組　石川　真捺
雪ふった　上からぽとり　落ちてきた
積もった雪に　手がたを二つ
※お母さんがある朝、まなちゃん雪、雪よ。庭に出てみるとぽとりぽとりと降り積もった真っ白な雪。手形を二つ。きれい。

優秀賞　堤小　二年一組　神谷　さな
さむい朝　おみそしる食べ　あたたまる
気もちがほっと　なごんでくるね
※おみそ汁大好きだよ。とくに冬の寒い朝のみそ汁は身体も心も温まるんだ。気持ちまでなごんでくるよ。今日も元気になる。

○　中学生・一般の部

豊田市長賞　前林中　二年二組　原田　らら

背(せい)比べ　大きく見えた　母の背が
抜かして越して　小さく見えた

※学校の頃母とよく背比べをした。母は大きくどっしりしていた。中学生になって私は急に大きくなった。大人になったよう。

豊田市教育委員会賞

前林中　二年五組　薬師寺千裕

学校で　ふつうに話す　毎日が
私の中の　幸せタイム

※ふつうに話す毎日を幸せと感じることのできる薬師寺さんは本当に幸せですね。毎日を大切にしたいものです。

市議会議長賞

会長賞金賞

前林中　一年三組　安田　佳穂

弾き始め　静まる舞台　あせ流れ
指先見つめ　広がる音色

※演奏会、会場は静まり返る。緊張の一瞬、冷汗が流れる。大きく深呼吸して指に心を集中。音色が会場に拡がる。

会長賞銀賞　前林中　三年四組　川村　空

夕日さし　二人並んだ　影を見て
まだ超えられぬ　母との差

※買い物の帰り道、久しぶりに母と二人。夕日が長い影をつくる。まだまだ自分が身体的にも精神的にも子供のように見えた

会長賞銅賞　青木町　奥村　良枝

福寿草　ふっくらと咲く　絵手紙の
添え書き“認知症(にんち)の　母の介護”と

※認知症の母の介護をしている友。介護の合間に素敵な福寿草の絵はがきを、私に送ってくれた。何と励ましたらいいか。

中日新聞社賞

前林中　一年一組　田口　愛穏

文化祭　心を一つに　頑張った
みんなの笑顔は　最優秀

※文化祭の合唱は学級の皆の気持ちが一つにまとまった。とにかく歌い切った。それで笑顔がこぼれたのだ。最高だ。よかった。

優秀賞　前林中　二年三組　冨田　桃花

おばあちゃん　耳が遠くて　聞こえない？
それでも韓ドラ　見て胸キュン

※おばあちゃんは耳が遠い。会話もスムーズにいかない。でも韓ドラは音質が合うんだね。涙を流すことも、よかったね。

優秀賞　前林中　二年三組　新屋　元夢

じいちゃんが　入院しても　ばあちゃんが
いつもお見舞い　仲良し夫婦

※じいちゃんは入院している、ばあちゃんは毎日見舞いに行く。ほんとにすごいなあと思う。心がホカホカしてくるね

優秀賞　駒場町　手嶌　容子

赤色の　可愛い新芽　梅の花
小さい頃の　あなたのようね

※ほら見あげてごらん。梅の花があんなにプックリとふくらんでいる。赤い梅の花だよ。可愛いあなた達の赤ちゃんの時を思い出す。

優秀賞　前林中　二年三組　前田　柊翔

お父さん　自慢ばっかり　うるさいよ
だけどそこには　伝わることあり

※お父さんはご機嫌の時にいつも、若い頃はこんな事もあってこうしたんだなど。うるさいよ、でも、胸に伝わるんだよなあ。

あとがき

今回の会報、会長の提案により、文字大きめの三段組と、読み易さに配慮しました。

さて、顕彰会事務局に参加し、早一年。総会担当に自分の名前を見付け嫌な予感が的中。会報・総会資料の作成は不慣れなワープロソフトに遊ばれ、やっと完成。印刷してみれば、誤字・脱字・段落や行間不揃い、やり直し。

いつ終わるともしれぬ、こんな繰り返しが面白くもあり愉しくもあることを、読者は知る由もあるまい。　（事務局　寺田）